国立国語研究所学術情報リポジトリ

21世紀におけることばの役割：求心性と多様性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2021

21世紀におけることばの役割
―求心性と多様性―

小池　生夫

ことばの研究には，ことばそのものの構造，機能を研究する分野とことばを使っての人間行動の研究をする分野がある。前者は理論言語学，後者は応用言語学とよばれる。

これらことばと関連諸科学の研究動向をマクロ的にとらえていくと，ことばの関連分野が「多様化」現象をおこしているといえよう。応用言語学では，複雑な言語行動の奥底に，必然と偶然がまじりあいながらおきる諸現象を多角的に解析し，それらの行動を記述し，コントロールする原理，原則を発見することを目的にしている。従来の伝統的なアプローチでの手法を越え，むしろその周辺や，隣接分野との接点でいままで軽んじられてきたものが研究の宝庫であり，創造の産物をうみだす場となることが期待されている。それは，発想がまったく新しく，成功すれば追従を許さない変容が期待される。

言語教育に直接関係する，狭い意味での応用言語学を，広い意味での応用言語学に拡大したのが最近の動向である。たとえば，心理言語学，第２言語習得，言語喪失，語用論，談話研究，バイリンガリズム，ピジンとクリオール，言語障害，教育工学などは，それぞれの分野内に言語教育と直接間接にかかわるものも持っている。

さらに，言語教育とは縁がないコンピューターを利用しての人工知能，大量言語解析，自動翻訳，辞書学や，社会言語学，言語人類学，言語と法，言語と経済，国際語，言語計画，言語政策なども応用言語学の研究分野であろう。

一方では，言語研究の「求心性」が見られる。それはちょうど山頂に向ってさまざまな登山口から登っていくような求心的な研究の動向である。たとえば，能は宇宙とともに科学の究極のテーマのひとつである。理論言語学では，生成文法が言語の文法を掘り下げることにより，間接的に能の機能に迫ろうとしているが，人工知能，第１，第２言語習得，言語喪失，バイリンガリズム，エラー分析なども，間接的に能の解明に寄与するのである。これは言語の役割の研究でもある。

21世紀には言語研究はさらに拡大し，既成の言語研究の間隙をついて，まったくあたらしい研究法がことばの科学についても出現するであろう。もしそうであるとしたら，それは応用言語学という人間の言語行動の総合関連科学が発展する結果であろう。

時あたかも本年1999年８月１日から６日まで国際応用言語学会第12回世界大会が早稲田大学で開催される。講演，シンポジウム，口頭研究発表など世界75ヵ国から，35分野，1350件というアジアではじめての，しかも今世紀の最後の巨大な国際会議になる。いま熱い期待が世界中のことばの関係者から注がれている。